

「海辺の美術館」便り

江連 晴生

(一)

亡き兄の友人の一人から「海辺の美術館便り」が届いたのは、兄の命日にあたる九月半ばの頃であつた。その「海辺の美術館便り」に添えられた手紙によると、その兄の友人の館長さんと兄とは、戦後間も無い頃、東京の浅草界隈でその青春時代を共にし、そして、それぞれがその東京での生活に見切りをつけ、それぞれが青春時代の夢を果たさずに故郷に帰り、それ以来、年に一度の年賀状のやり取り程度で、二度とお会いすることもなかつたという。

その手紙によると、亡き兄が、いまだ、二十歳前後の、働きながら絵画塾に通っていた頃の油画とデッサンの類とかの何点かが、その「海辺の美術館」に展示されているというのである。

その「海辺の美術館」は、新潟県の日本海

に面しての人口三千人に満たない漁村の眺望の
良い所にあり、その村の廃校となつたものを
を改築して、一時はやつた「村おこし」の一
環として、「長期滞在用のアトリ工付きの宿
泊所」というのがその実態で、それを正式に
は「海辺の村分教場美術館」という名称のも
とに、その亡き兄の友人が、自称館長とな
り、村より委託されて管理・運営の一切をや
つているというのである。

その「海辺の美術館便り」で特に目につい
たのは、良寛の出生の地の出雲崎の「良寛記
念館」や良寛の最期の地の和島村の「良寛の
里美術館」の紹介などがあつて、それらの良
寛にまつわる所を訪問するにも格好の土地柄
のようなのである。それ以上に面白いと思つ
たのは、その「海辺の美術館」の利用料が、
他県からの宿泊者は、一泊二日で千円という
格安で、新潟県在住者はその倍の二千円（例
外有り）と、完全に他県からの長期滞在者を
優遇しているということなどであつた。

この「海辺の美術館」では、自炊などが原則のようなのであるが、近くに民宿などがあり、そのこと連携していて、低料金で食事なども十分に可能のようなのである。一週間滞在して、利用料が六千円、そして、その食事代も、一週間で、利用料と同じ程度の額というのであるから、若い画学生などが、長期に滞在して、製作に励むという、そういうことを狙ったものなのであろう。

とにかくにも、亡き兄の若い頃の絵画を目にすることも出来るし、そして、一度は訪れてみたいと思っていた、良寛関連の遺跡なども見られるということもあつて、この十一月の連休を利用して、一週間程度、その「海辺の美術館」に滞在することとなった。

（二）

新潟行きの新幹線に乗ると、本当に良寛の里の入り口ともいえる燕三条の駅にはあつという間に着いてしまう。その燕三条の駅に、「海辺の美術館」の館長さんが、出迎えてく

れるという。その館長さんとの落ち合う場所は、駅前の「良寛像」の前ということ、ここで、初対面の「海辺の美術館」の館長さんと、十一月の文化の日の午後、始めてお会いした。

館長さんは、奥様と一緒に出迎えてくれて、館長さんも奥様も、亡き兄と同じく位の年齢で、七十歳前後ということなのであろうが、年齢よりも若く、まだ、還暦を迎えたばかりの私らと同年齢のようにお見受けした。館長さんは、私を見ると、手を上げながら「お兄さんにそっくりですね」と、私のことを「弟さん」といい、「弟さんの声を聞いて」と、五十年前の在りし日のお兄さんの声の全く同じなので驚きました」と、本当に、旧知の間柄のように接してくれて、それが実に自然であることに、今まで味わったことがないような、言い知れず感動のようなものを覚えたのであった。

館長さんの奥様も、亡き兄とはお知り合い

のようで、車中での話しによると、亡き兄と館長さんご夫妻とは、先の「海辺の美術館便り」に同封されていたお手紙の、若かりし頃の東京での絵画塾の仲間ということのようなのである。

その奥様の話しによると、「あなたのお兄様は、太宰治のファンで、この旦那様の館長さんは坂口安吾ファンで、私はというと林芙美子ファンで、そんな三人が、ほそぼそと東京の片隅で、本当に、六畳一間で寝起きしていたの」ということなのである。「花の命は短くて、苦しきことのみ多かりき」と林芙美子の一節を口にしながら、「そんなことを口にしていた私が生きながらえて、三人のうちで、あなたのお兄様が一番先にお亡くなりになるなんて、そのお知らせがあつても、とても信じられませんでした」と、その奥様は、遠くに佐渡が島が見えるという日本海の方に目をやりながら、しんみりした調子で話されたのである。

この館長ご夫妻や亡き兄らが東京におられた頃は、昭和二十年代の後半で、昭和四十年代の、一世を風靡した「南こうせつとかぐや姫」の「神田川」などのフォークソングの遙か以前のことではあるが、その館長さんや奥様の話を聞きながら、その「神田川」の一節などが脳裏をかすめるのであった。

「あなたはもう捨てたのかしら

二十四色のクレパス買って

あなたが描いた私の似顔絵

うまく描いてねって言ったのに

いつもちつとも似てないの

窓の下には神田川

三畳一間の小さな下宿」

（三）

晴れた日には佐渡が島が眺望できるという、その「海辺の美術館」に着いたのは、丁度、太陽が没する頃で、見事な西日を受けての日本海を目にして、思わず、「素晴らしい所ですね」と、この景色に接しただけでも、

ここに来た甲斐があるように思えたのである。と同時に、この「海辺の美術館」の第一印象は、これこそ、亡き兄らの時代であつた、昭和二十年代の後半に空前の大ヒットをした、木下恵介監督による、高峰秀子出演の「二十四の瞳」の、その映画の舞台となつた瀬戸内・小豆島の分教場のような感じであつた。建物それ自体は、日本材を活かして、見違えるように近代化されているが、校庭といひ、そこからの眺めといい、あの映画の一場面の中にいるような錯覚をすら覚えたのであつた。

そのことを館長さんご夫妻に言うと、「ここに来た年配の方は、どなたさんも、そう言いますよ」ということであつた。「しかし、今の若い人達は、『二十四の瞳』の映画のころなど、全く無関心で、ここに来て、『パソコン』は使えるの」と、そういう会話が多いですね」ということであつた。

この「海辺の美術館」は、部屋数は五部屋

の定員が二十名で、他に、館長室兼ミーティング室、食堂兼調理場、風呂場兼トイレ、そして、講堂兼ギャラリー、と、そして、この講堂兼ギャラリーに、ここに滞在して製作したものなどが中心に、絵画、工芸、書道、そして、彫刻など、総数にすると、小品ではあるが、一千点近い位のものが、壁面とパネル板などを利用して、見事に展示されていたのである。

「館長さん、これは、まさしく『海辺の村分教場美術館』ですね。まさに、館長さんのお手紙にありました、一大の事業ですね」と、またまた、肝を冷やされるような、そんな感慨を覚えたのである。「一度、亡きお兄さんに見ていただこうと、それでも、もう叶わない夢となつてしまいました」と、そのことが本当に悔しいような、そんな感じて館長さんは言葉を続け、その作品の一つ一つについてコメントなどをしてくれたのである。「ここには、お兄さんの絵はありません。こ

ここにあるものは、ここに滞在して、製作した
方々の作品で、私が趣味で収集したものなど
は、館長室の方に展示するようにしているの
です」と、言いながら、館長室の方に移
動して、そこに陳列されている、二十点位の
作品の中から、この「コスモスと少女」は、
「これがお兄さんの作品ですよ」と、館長さ
んのデスクの脇に飾ってある一枚の絵を紹介
してくれたのである。それは、「コスモスが
咲き乱れている花野の中に、ルノワールが描
くような一少女が描かれている」ものであつ
た。

私は、亡き兄が、その青春時代に、血みど
ろのような生活の中で描いた、そのルノワ
ール風の絵画に接しながら、しばし、呆然とし
て、妙な血肉の騒ぐような衝撃を受けたので
ある。「兄は、コスモスが咲き乱れる花野の
季節に、生まれ故郷の、那須野の一角で、そ
の花野に囲まれながら亡くなりました。それ
で、戒名も、『秋桜院』と、兄は、きっ

と、この若かりし頃の、この『コスモスと少女』の絵画の世界に帰っていったのですね。と、自分に言い聞かせるように呟きながら、その亡き兄の作品に見入ったのである。どの位の時間が過ぎたのであろうか。、その館長室には、夕食の準備などで席を外していた、館長さんの奥様もお出でになっていて、「弟さん、この花野の中の、この少女のモデルは、そのモデルは、私なのよ。このお兄さんの絵は、私とあなたのお兄さんと、そして、これを宝物のように、何時も座右に飾っていた、この人」と、その館長さん、を指さしながら、「私達の、私達三人の、あのかぐや姫らのフォークソングの『神田川』の物語なのですよ」とおっしゃれたのである。私は、その奥様の言われたこと、その真意をはつきりと理解すると共に、亡き兄が生前に、この「海辺の村分教場美術館」を訪れなかつた、その理由を、その奥様の言葉の調子から、はつきりと理解できたのである。